

男性労働

『日本労働研究雑誌』編集委員会

本特集のねらい

労働が性別の観点から論じられる場合、女性という性別に焦点が当てられることが圧倒的に多い。もちろん、多くの労働研究の対象が実質的に男性だったという意味では、労働研究はもともと男性労働研究だったともいえるが、そこでの「男性」はいわば一般的、標準的、規範的働き方を体現する存在にすぎず、男性が男性であることによって引き受ける諸経験をひとつの「特殊」としてまなざす視点がかならずも取られてきたわけではない。他方、現実社会の動きをみれば、従来自明視されてきた前提の変化、働き方モデルの揺らぎがますます指摘され、これまでの男性労働のあり方がひとつの歴史的特殊であったことが誰の目にも明らかになりつつある。その変化が男性たちに、また男性たちをとりまく状況に何をもたらしてきたのか、もたらしつつあるのか、男性の働き方、ひいてはそれに関わる組織、家族、社会のあり方はどこへ向かうのかを丁寧に考究していく必要性は、いっそう高まっている。

本特集では、働き手としての男性の現在に迫る諸論考を集めた。男性労働はどの程度変わったのか。男性は変化のなかでどのような困難や新たな可能性を経験しているのか。職場や家族、地域、より大きな社会的諸制度は、ますます高まる男性の多様性を包摂しようものになっているのか、いないのか。各論考は、関連の既存データや研究知見を概観した上で、主に質的アプローチで男性たちの経験を浮かび上がらせている。どのような労働研究も、当事者経験への想像力を欠いては、その本来の意義を発揮できない。変化のただなかを生きる男性たちの経験の諸相に分け入る諸論考から、多様なアプローチによる今後の研究展開に資する素材を汲み取っていただけることを願っている。

「男性労働」への視座

戦後の雇用がその成員を、家族のための稼ぎ手と明

示的に想定して以来、男性は男性であるという理由で、多くの職場の中核的役割を担ってきた。生活時間のほとんどを職場や職場の人間関係のなかで過ごし、家族の生活の安定や職場での評価、一定の「やりがい」などと引き換えに、仕事の要請をほぼ無制限に受け入れるよう求められる、いわゆる「サラリーマン的働き方」と、男性たちのそのような献身によってこそ可能になった職場や組織、社会のあり方は、多分にカリカチュアライズされたものだとしても、経済的に(のみ)家族の生活を支える不在の夫、不在の父という家庭での男性の位置と表裏一体だった。

このようなサラリーマンモデルも、その揺らぎが多方面から指摘されて久しい。モデル転換の大きな契機といわれる「失われた20年」の起点となった1990年代以降、男性労働は大きな変化圧力を被ってきた。実質賃金の低下、献身ではなく成果を求める評価方式の広がり、男性非正規労働者の増加など労働の場における圧力、「稼いでくる」だけでなく自ら家族のケア労働に携わることへの女性・社会からの期待の高まりや、その一定の価値を男性たち自身も感じることからくる圧力、また、従来のモデルを男性の自己犠牲の上に成り立ってきたものにとらえ、個としてのより自由な生き方をめざす、とりわけ若年層を中心とする男性たちからの圧力——。従来モデルの揺らぎの先にまず見えてくるのは、男性労働の多様化である。

働き方の多様化はこれまで女性労働の側で大きく先行してきた。そのため、現在の変化を、女性の状況に男性の状況が追いついてきているだけだとみるむきもあるかもしれない。だが男性労働研究は、女性労働研究のたんなる後追いではありえない。たとえば、家庭での役割はあるが仕事にもっと打ち込みたい女性が家事・育児を誰かに任せて働く状況と、仕事での役割はあるが家庭にもっと打ち込みたい男性が仕事を誰かに任せて家に帰る状況とでは、「誰かに任せる」ことの意味合いはまったく異なる。私たち一人ひとり、家

庭では（一応）他者と取り換えのきかない存在だが、職場ではかならずしもそうではない。家事育児を誰かに任せても母は母だが、仕事を他者に任せれば職場成員としての本質そのものを一定程度手放すことにもなりうる。仕事に打ち込みたい女性が非婚を選択することへの社会的許容度と、家庭に打ち込みたい男性が無業を選択することへの社会的許容度などにも違いがみえるだろう。

もちろん、男性たちは変化や困難に直面して途方にくれているばかりではない。本特集の諸論考では、男性たち自身がさまざまな方向で困難を克服していく姿、それを支える人々のあり方も描き出される。家族のための働き手として、また職場で一定の役割遂行を期待される存在として、男性という役割に閉じ込められてきた、あるいは自らを閉じ込めてきた男性たちが困難を乗り越えていくとき、そこには働き手にとって家族や仕事や、職場がもちうる新たな意味が切り拓かれる。

本特集の構成

冒頭の2論考は、男性稼ぎ手モデルの揺らぎの現在に迫る。まず多賀論文では、「家族扶養責任」と「仕事における卓越」という、従来のサラリーマンモデルを支えてきた二大価値が男女双方から依然として支持される一方、その相対化の傾向もますます強まる現在の社会意識状況が、各種調査や筆者自身の調査結果に基づいて解きほぐされる。価値の葛藤を乗り越える、いくつかの働き方モデルも提案される。小笠原論文は、我が国での共働きモデルへの移行の遅れを指摘しつつも、自身の調査などから、ここ10年ほどで大きな変化が生じている可能性に注意を促す。女性の側での就業継続見通しや稼得意識の高まりを受けて「男性1人働きモデル」からの自由を手にしつつある男性たちは、スウェーデン男性のようにより積極的に家庭に参加していくのか、それともアメリカで注目されてきた一部の男性のように家庭から離反していくのだろうか。

続く2論考では、男性が家庭内役割として担うアンペイド・ワークをめぐる状況、求められる対応が論じられる。まず石井クンツ論文では、男性の育児家事労働が取り上げられる。2000年代後半から男性の育児

参加を後押しする官民の動きが活発化するなか、男性たちの意識は積極的にケア役割を担う方向へと変わりつつある。一方で意識と行動のギャップ、男性特有の二重負担やストレスの問題があり、政府・地方自治体、企業、地域社会、市民社会による支援の新たな課題が浮上してきている。津止論文は男性介護者の状況を扱う。現在、家庭介護を行う主たる介護者の3人に1人は男性であり、男性介護者の3分の2が有業である。仕事と介護の両立を前提としたとき必要となる支援のあり方を示すとともに、働きながら介護する男性たちの経験が職場だけでなく介護という労働のあり方を見直す原動力とすべきだと論じる。

特集後半は、それぞれ特徴的な切り口から男性労働経験の特質を探る3つの論考からなる。中田論文は、男性保育者を事例に職場マイノリティとしての男性労働経験を考察する。多くの職場では透明でありうる男性という性別も、男性が性別マイノリティとなる環境ではいやおうなく可視化される。様々なステレオタイプや排除圧力といった困難に直面しながら、専門職として働き続けようとする男性たちの意識と行動は、保育の職場に新たな可能性ももたらしている。伊藤論文は、労働と社会の構造的変容を、「見えない問題」であり続けてきた「男性性の危機」、男性の間に広がる「原因不明の剥奪感」の観点から浮かび上がらせる。締めくくりは性的マイノリティ支援団体理事長の村木氏による論考である。これまで、男性労働を相対化する視点はもっぱら女性労働研究によって提供されてきたが、性的マイノリティが経験する困難の諸相は、職場で男性であることがもつ隠れた前提の数々を別の角度から明るみに出す。

女性労働の変化をうながし女性の活躍を後押ししようとする動きが、従来男性が体現してきた労働モデルの負の側面を意図せず強化してしまう危険としばしば隣り合わせなのに対し、男性労働の変化こそは、労働の意味を真に変容させうるものかもしれない。だとすれば、私たちはその行方を注視し、知見をよりよい社会の構築へと結び付けていかなければならない。

責任編集 池田心豪・金野美奈子・山下充
(解題執筆 金野美奈子)